

若山牧水生誕 140 年記念事業「あなたが選ぶ牧水の一首」
候補 20 首（歌人・伊藤一彦氏選）

- 1 樹は妙に草うるはしき青の國日向は夏の香にかをるかな
き たえ くさ あお くにはひゅうが なつ か

〔意味〕樹々の緑も、草の緑も本当に美しい。その意味でわがふるさと日向は青の国である。

特に夏の緑は香りたってくるほどすばらしい。

- 2 けふもまたころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつあくがれて行く
かね な な ゆ

〔意味〕今日もまた、巡礼者が鉦を鳴らすように、私もころの鉦を鳴らし鳴らししながら、

どこまでもあこがれの旅を続けている。

- 3 幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく
いくやまかわこ ゆ さび は く け ふ たび

〔意味〕どれだけの山や河を越え続けて行ったら、寂しさのなくなる国だろうか。そう思いな

がら、今日も旅を続けている。

- 4 白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ
しらとり かな そら あおうみ そ

〔意味〕白い鳥はかなしくないだろうか。空の色にも海の色にも染まらないで一面の青色のな

かをひとり白くただよっている。

- 5 山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざ唇を君
やま み やま ひ て うみ み うみ ひ て くち きみ

〔意味〕山を見てごらん。山に日が照っている。海を見てごらん。海に日が照っている。私も明

るく君に接吻したい。

- 6 いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや
ゆ ゆ み やま み きみ た

〔意味〕さあ、行こう。まだ見ていない山を見に行こう。そうでもしなければ寂しさに耐えら

れない。君は耐えられるか。

- 7 父の髪母の髪みな白み来ぬ子はまた遠く旅をおもへる
ちち かみはは かみ しら き こ とお たび

〔意味〕故郷を離れて東京にいる間に、父も母も年老いて髪が白くなった。そんな両親が心配

だが、私の心はやはり旅にあこがれる。

- 8 ふるさとのお秀が墓に草枯れむ海にむかへる彼の岡の上に
ひで はか くさか うみ か おか へ

〔意味〕ふるさとのお秀さんの墓に寂しく草が枯れているだろう。広い海にむかっているあの

岡の上で。

- 9 かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな
あき はな

〔意味〕私の耳のそばで秋ぐさの花が語りかける。ほろんでしまったものはなつかしいね、と。

- 10 白^{しら}玉^{たま}の^は齒^はにし^{あき}みと^よほる^{さけ}秋^のの^の夜^のの^の酒^のは^のし^のづ^のかに^の飲^のむ^のべ^のかり^のけれ

〔意味〕 齒にしみとおるようにおいしい秋の夜の酒はしづかに飲むのがいちばんである。

- 11 かん^のが^のへて^の飲^いみは^にじ^{ごう}め^にたる^{さけ}一^{なつ}合^のの^の二^の合^のの^の酒^のの^の夏^のの^のゆ^のふ^のぐ^のれ

〔意味〕 考えながら酒を飲みはじめ、一合が二合となっていく心地よい、静かな夏の夕ぐれであることよ。

- 12 ふ^のる^のさ^のとの^の尾^の鈴^のの^の山^のの^のかな^のし^のさ^のよ^の秋^のも^のか^のす^のみの^のた^のな^のび^のきて^の居^のり

〔意味〕 ふるさと坪谷の尾鈴山はかなしい。晴れて大気も澄んでいるはずの秋の今も、かすみ
が薄くかかってたなびいている。

- 13 飲^のむ^のな^のと^の叱^のり^の叱^のり^のな^のが^のら^のに^の母^のが^のつ^のぐ^のう^のす^の暗^のき^の部^の屋^のの^の夜^のの^の酒^のの^のい^のろ

〔意味〕 久しぶりに帰郷した息子に母が酒をいましめつつ、しかし酒を注いでやっている。親
子の情は深く、濃い。

- 14 妻^{つま}や^の子^こを^のかな^のし^のむ^の心^のわ^のれ^のと^の身^のを^のかな^のし^のむ^のこ^のころ^の二^のつ^のな^のが^のら^の燃^のゆ

〔意味〕 妻や子を愛する気持ちをたっぷり持っている。しかし、一方で自分の身と心は妻子を
置いて旅に出ようとする。妻子も自分も熱く愛している。

- 15 啼^なく^の声^のの^のや^のが^のて^のは^のわ^のれの^の声^のか^のと^のも^のお^のも^のは^のる^の声^のに^の筒^の鳥^のは^の啼^のく

〔意味〕 山で筒鳥が啼く声を聴いている。すると聴いているうちにこの自分が啼いているので
はないかと思えてくる。鳥は自分か。

- 16 う^のす^のべ^のに^のに^の葉^のは^のい^のち^のは^のや^のく^の萌^のえ^のい^ので^のて^の咲^のか^のむ^のと^のす^のな^のり^の山^の桜^の花^の

〔意味〕 うす紅色に葉が早くも萌え出して咲こうとしている。私の愛する山桜の花が。

- 17 若^{わか}竹^{たけ}の^の伸^のび^のゆ^のく^のご^のと^のく^の子^のども^の等^のよ^の真^の直^のぐ^のに^のの^のば^のせ^の身^のを^のたま^のし^のひ^のを

〔意味〕 若竹が伸びるように、子ども達よ、まっすぐにのばせ、身を、そして魂を。

- 18 上^{かみ}つ^の瀬^のと^の下^のつ^の瀬^のに^の居^のり^のて^のを^のり^のを^のり^のに^の呼^のび^の交^のし^のつ^のつ^の父^のと^の釣^のり^のに^のき

〔意味〕 川上にある瀬と下流の方にある瀬にそれぞれいて、ときどき呼びあいながら父と魚を
釣ったものだった。

- 19 足^{あし}音^{おと}を^の忍^{しの}ば^のせ^のて^の行^のけ^のば^の台^の所^のに^のわ^のが^の酒^のの^の壇^のは^の立^のち^のて^の待^のち^のを^のる

〔意味〕 家族に酒を控えるように言われているが、飲みたくて夜の台所にこっそり出かけた。
何と酒の壇は立って待ってくれているではないか。

- 20 芹^{せり}の^の葉^のの^の茂^のみ^のが^のう^のへ^のに^の登^のり^のゐ^のて^のこれ^のの^の小^の蟹^のは^のも^のの^のた^のべ^のて^のを^のり

〔意味〕 庭の芹の葉の上で小蟹が一心不乱に何かを食べている。病気が重くなり、食べること
も中々できない自分は小蟹のすこやかさに見入っている。